

罪人の友になられたイエス マタイ9:9~13, 18~26 / 李正雨師

今日の福音書では、三つの部類の人々が出てきます。最初は、徴税人と罪人たちであり、2番目は、出血の病を患っている女性、3番目は、死んだ少女です。イエス様はこのような人々と出会いますが、この三つの部類の人々みんながイエス様から大きな影響を受け、変わります。ところが、面白いのは、この三つの部類の人々は、当時の状況で一般的ではなかった人々だったということです。まず、一番目の人々、徴税人と罪人と出会ったイエス様の話から見てみましょう。今日の福音書9節の言葉です。「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。」

イエス様が出会った一番目の部類の人は、徴税人でした。そして彼にご自分に従いなさいと言われると、彼は、その場から立ち上がってイエス様に従い、十二の弟子の一人になりました。彼の名前はマタイであり、今日の福音書であるマタイによる福音書の著者として推定される人です。しかし、このようなイエス様のお召しは、当時の状況ではかなり不思議なことでした。当時の徴税人は非愛国者、律法を破る罪人として多くのユダヤ人から非難されていたからです。私たちは毎週説教を通してイエス様の教えを聞いており、その教えを理解するために当時の状況も一緒に聞いています。だから、当時の状況について多くのことを知っていますが、徴税人のことについては、わかりにくい部分があると思います。一応、税金を徴収するという理由によって、同じ民族に非難を受けたこと、これがよく理解できないでしょう。しかも今の日本は、納税の義務をよく守っている国の一つです。そのため、さらに税金のことによって非難されることが理解しにくい状況です。

しかし、過去のユダヤ人は、この税金と納税について敏感でした。なぜなら、ユダヤ人に課されたローマの税金は高かったし、すでにユダヤ人たちは、自分の国のために税金を払っていたからです。皆様が知っておられる十分の一献金が当時の税金の役割をしていました。しかし、イスラエルを征服したローマ政府は、十分の一献金以外の税金を収めさせました。そしてこの徴税のために商業的、地理的に重要なところには収税所を置いてローマの管理者を派遣し、ローマ政府が要求する税金を定期的に収めさせました。これだけでなく、陸路や海路で輸送する財産に対する関税や様々な間接税も収めさせましたが、この徴収をローマは同じ民族の請負師たちに任せ、このことは主に徴税人と呼ばれた人々がしました。つまり、当時の徴税人は公務員ではなく民間の事業者だったということです。そして、彼らが収める税金には、いくつかの構造的な問題がありましたが、これを利用して自分の腹を満たした徴税人が多かったそうです。だから人々は、徴税人を非難し、自分たちの税金が自分のために使われていなかったのも、税金の徴収は搾取だと思いました。このような過程で、徴税人は人々に非難され、排斥されるようになったのです。

しかし、イエス様はこのような徴税人を招かれました。多くの人々から非難されている人をご自分の弟子にされたのです。これは、当時どの先生やラビもしていなかったことです。みんなが徴税人との関わりを避け、特に先生やラビやファリサイ派の人々は、先に立って徴税人を非難することが自分たちの正しさを示すことだと思いました。しかし、イエス様はこのような彼らのところに行かれ、彼らと呼ばれ、彼らと共に交わりました。そしてご自分だけでなく、ご自分の弟子たちも彼らと共に交わらせました。今日の福音書10節の言葉です。「イエスはその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。」ここでの罪人とは、法律的に犯罪を犯した人を指すのではなく、ユダヤ社会の道徳的な規範や伝統を守らなかった人々を指すのです。徴税人はそのような人々の中で代表的な人であり、ユダヤ社会で罪人として扱われました。

私はこの10節の言葉が私たちに大きなインスピレーションを与えていると思います。イエス様が徴税人などの罪人として扱われていた人のところに行き、彼らと交わり、弟子たちもそのようにさせたというのは、私たちがどんな気構えを持って人々に対するべきかを教えてくれることだと思います。私たちが求めなければならないことは何なのか、私たちの交わりにとって足りないことは何なのかを、イエス様は教えておられ

るのです。もちろん、このようなイエス様の教えに従うのは、簡単ではありません。今日の福音書の弟子たちも容易ではなかったでしょう。それで、ファリサイ派の人々が弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか（11節）」と尋ねたとき、弟子は答えることができず、イエス様がこの質問に答えられたのだと思います。イエス様はこう答えられました。12～13節の言葉です。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

イエス様は、ご自分と弟子たちが徴税人と罪人のところに行った理由を確かにおっしゃいます。そして、今日の第一朗読であるホセア書の言葉を引用され、これがご自分の意志だけでなく、神様が私たちみんなに望んでおられることだということをお教えます。ですから、イエス様がなさったことは、神様の願いであり、私たちが目指すべきことなのです。罪人を招くために来られたというイエス様の言葉。この言葉が私たちの考えと心に大きな影響を与え、私たちを変えさせるのだと思います。引き続き、今日の福音書でイエス様が出会った他の部類の人々を見てみましょう。

今日の福音書、18節によると、イエス様はある指導者に頼まれます。死んだ自分の娘を生き返らせてくださいという願いです。この話を聞いたイエス様は立ち上がり、彼について行かれましたが、行かれる途中、出血の病を患っている女と出会われます。彼女は12年も出血の病によって苦しめられたので、自分の病気が癒されるために、イエス様の服の房に触れます。しかし、旧約聖書のレビ記、ユダヤ人の律法によると、触れたり触れられたりしてはならないことがあります。出血する女との接触、死者の体に触れることは、してはいけないこと、まさに律法を破ることです。このようなことは、感染などの衛生と関連があったので、これを守らなかった人々は、必ず隔離されなければならないというのが律法の教えです。ところが、今日の福音書でのイエス様は、律法で禁止されていることをなさいます。出血をしている女に触れられ、死んだ少女の手をお取りになります。今日の福音書20～21節、25節の言葉です。「そこへ十二年間も患って出血が続いている女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れた。『この方の服に触れさえすれば治してもらえ』と思ったからである。」「群衆を外に出すと、イエスは家の中に入り、少女の手をお取りになった。すると、少女は起き上がった。」

イエス様は、律法で禁じられていたことをなさいました。では、イエス様はこれによって汚れた者となり、隔離されなければなりません。人々と離れた後、体をきれいにし、一日が過ぎなければ日常生活に戻ることができませんでした。ところで、とんでもないことが起こりました。イエス様が汚れた者になったのではなく、イエス様と接触した人々がきれいになったのです。12年間も出血が続いてきた女は、イエス様の服の房に触れただけで、出血が止まりました。イエス様が死んだ少女の手を取ると、死んだ少女が起き上がりました。イエス様は、汚れることも、感染されることもありませんでした。むしろ、イエス様によって汚れたすべてのものがきれいになりました。これがメシアの救いであり、この救いがイエス様によってこの世に臨まれたのです。

私は、このようなことがクリスチャンに起こること、クリスチャンが求めなければならないことだと思います。汚れた所に救いが臨まれるように、罪がある所に福音が伝えられるように、私たちは祈らなければなりません。ファリサイ派の人々や当時の律法の先生のように人々を分け、自分の信仰的な正しさのために人々を指摘したり、自らが罪人から離れたりするのではなく、イエス様のように徴税人と罪人のところに行かなければなりません。キリスト教で語っている聖なる生活とは、自分の信仰のためにこの世の汚れたものから区別され、離れて生きることはありません。イエス様に頼り、イエス様の御心に従って生きるのが聖なることです。たとえ、それがこの世の基準では、汚れたように見えることでも、大丈夫です。イエス様の御名によって汚れたものは、みんなきれいになるからです。マルティン・ルターもこれを強く主張し、修道院生活は無用であることを何度も言い出しました。ただイエス様に頼ってください。イエス様が罪人の友になられたことと、その場に弟子たちも連れて行かれたことを覚えてください。イエス様がおられる場所が聖なる場所であり、イエス様に従って行くことが正しいことです。この信仰が皆様を聖なる信徒に作ってくださいますように。罪人を招くために来られたイエス様がいつも皆様と共におられますように、主の御名によって祈ります。アーメン